大中PRIDE

大津町立大津中学校
生徒指導通信　９号

令和５年６月２１日（水）
文責：岡村　康平

「ピンチの裏側」

今週の生徒指導通信も中体連に向けて、ある高校の話を紹介します。

話はさかのぼること、２００７年、夏の甲子園。夏休み中の風物詩ともいえる甲子園球場で行われる高校野球大会です。九州、佐賀代表として出場することになった佐賀北高校野球部。調べてみると、春先まではなかなか良い結果を出せなかったチームでした。その佐賀北高校は、甲子園の開幕戦で福井商業高校に完封勝ちをして、甲子園初勝利を挙げると、２回戦の宇治山田商戦では延長１５回を引き分け。その後の再試合を制しました。３回戦の前橋商戦では、大技小技を駆使して勝利を収めると、準々決勝戦の帝京戦では延長１３回の大接戦をサヨナラ勝ちで制します。準決勝では、長崎日大に完封勝ちすると、決勝の広陵戦では４点ビハインドの８回に逆転満塁ホームランが飛び出して優勝しました。

佐賀北高校は公立高校。普通科と芸術科の２つの科があります。もちろんスポーツ特待生は一人もいません。まさに文武両道とも言えます。その夏の甲子園優勝校・佐賀北高校の部室に、ある詩が飾られていました。

ピンチの裏側

神様は決して
ピンチだけを
お与えにならない

ピンチの裏側に
必ず　ピンチと
同じ大きさのチャンスを
用意して下さっている

グチをこぼしたり
ヤケを起こすと
チャンスを見つける
目がくもり
ピンチを切り抜ける
エネルギーさえ
失せてしまう

ピンチはチャンス

どっしりかまえて
ピンチの裏側に
用意されている
チャンスを見つけよう

この詩は、詩人の山本よしきさんが佐賀北高校へ贈られた詩です。佐賀北高校が全国制覇する８年前に贈られたそうです。山本よしきさんは、２０際の頃から詩作を始め、４５歳でもともと務めていた会社を退職されました。その後は**「ピンチだらけの人生」**であったそうです。その頃の作品が、上記の作品です。

「ピンチは神様が与えた昇級試験。乗り越えて成長する。」と自分に何度も言い聞かせました。佐賀北高校が優勝した後、山本よしきさんの詩が各局で取り上げられました。山本さんが佐賀北の野球部員が部室の看板に飾っているというエピソードを知ったのは、歓喜の優勝の翌日。後日、佐賀北高校を訪ねると、日差しや風雨で看板は破れかけていました。山本さんは「本当に心を支えとしてくれていたのか」と半信半疑になったそうです。しかし、８年前に比べると多少の汚れはありましたが、詩の文字は、はっきりと印字されてありました。山本さんはすぐに部員に印字されている理由を聞いたそうです。すると、部員は、

「８年前に山本さんから頂いた詩は、私たち佐賀北高校野球部にとって大切な詩です。卒業された先輩方から『ピンチの時は、あの詩を思い出せ』と受け継がれてきました。８年前から、私たち野球部の**心の支え**として存在してくれました。月日が経ち、もちろん文字は薄れてきました。しかし、その薄れた文字を私たち部員が黒ペンキでなぞり、なるべく元の状態に近づくように管理してきました。」と返答しました。８年前から大切にしていたことを知った山本さんは、次の詩を贈られました。

新たなる人生の　夏に向かって

忘れないで欲しい
０泊３日で応援しに来てくれた
仲間たちのことを
朝晩トスを上げてくれた
控え選手のことを

知って欲しい
負けて甲子園を去って行った
選手の心の痛みを
奇跡の扉を開けたのは
君たちだが…
その扉を用意してくれた
多くの人たちがいることを

気づいて欲しい
御両親　御家族のおかげで
野球ができる幸せを
健康で何不自由ない身体を
持っていることの幸せを
“有頂天”という最上(頂)の
天があることを　謙虚という
ブレーキをかけて
登らないようにすることを

君たちの人生の夏は
今　始まったばかりだ
人は一人では　生きていけない
支え　支えられて生きている
感謝の心を持って
そのことを深く魂に刻んで欲しい
新たなる人生の夏に向かって
歩き始めた君たちよ